

大航海時代を主導した 16 世紀のスペインは、ヨーロッパとアメリカ植民地のみならず、フィリピンを支配し、東南アジアや東アジア世界にも進出した。16 世紀末～17 世紀前半のポルトガル併合とマニラ航路の開発は、スペイン帝国とアジア世界との人的物的関係をいっそう緊密なものとし、アジア人移民や強制移民としての奴隷をアメリカ植民地に流入させる主要因となった。しかし近世のアジア人移民研究は、研究領域の分断と多様な言語を必要とする史料の性格などに妨げられ、大西洋を舞台とする黒人強制移民研究に比し、研究の遅れが著しい。本報告は、マニラの日本人町や中国人町に関する研究成果と 1613 年のリマの人口調査史料を踏まえ、17 世紀初頭のスペイン帝国におけるアジア人移民の実態解明を模索したものである。1613 年の人口調査史料とは、深刻な危機に直面していたスペイン帝国の再建を目的に、ペルー副王モンテスクラーロス公が実施したものである。スペイン帝国を再建するには、ポトシ銀山を抱えたペルー副王領の人的物的資源の動員、民衆教化が不可欠であり、マイノリティーであるアジア人移民についてすら、その名前、性別、年齢、職業、出身地などが調査されている。

1613 年の人口調査によれば、リマの人口約 25000 人のうち、スペイン人が約 10000 人、黒人 10000 人(大多数は奴隷)、インディオ約 2000 人、メスティーソ約 1000 人であり、アジア人——人口調査ではインディオに分類された——は 114 人であった。114 人のアジア人の内訳は、中国人 38 人、日本人 20 人、ポルトガル領インドの出身者 56 人であり、法的には自由人 62 人、奴隷と解放奴隷 52 人であった。

アジア人移民は社会経済的安定や上昇を求め、スペイン人の奉公人として移住した人々であり、主にメキシコ経由でポトシ銀山を有するペルー副王領の首都リマに定住した。リマはマニラと同様にスペイン帝国の一部を構成する都市であり、支配言語や宗教、都市の政治・経済・法制度が比較的近く、マニラのアジア人にとって移住しやすい都市であったろう。

17 世紀初頭のマニラでは、自治権をもつ日本人と中国人が城壁外に、約 2000 人と 20000 人の日本人町と中国人町を形成し、そこに集住していた。これらの日本人と中国人の中にはキリスト教徒も少なくなく、病気や貧窮時、冠婚葬祭時の相互扶助組織としての兄弟団が組織されていた可能性は大きい。

リマに定住したアジア人移民 62 人——子供や配偶者を含む数字である——のうち、人口調査で具体的データがえられるのは 30 人のみである。性別構成は男性 20 人に対し女性は 10 人、既婚未婚の別についていえば、既婚者 17 人、未婚者 11 人、不明 2 人である。既婚者の家族形態は単婚小家族であるが、生活基盤が不安定なためか、子供の数が著しく少ない。既婚者は同じアジア人やインディオを配偶者とする場合が多い。黒人女奴隷と結婚し

た場合には、子供は母親の身分を継承し、奴隷とされたためである。債務によって奴隷身分に転落する者も存在したはずであり、アジア人移民と奴隷の境界は固定したものではなかった。

アジア人移民の年齢構成は15～35歳という生産年齢帯の者が多数を占め、男性の多くが繊維関連手工業、女性は主に家内労働に従事した。出身地はマニラとその近郊が最も多く、その中には長崎出身と推定される日本人ひだえり職も確認される。これらのアジア人移民は特定地区に集住したわけではないが、デスカルス街、イエズス会街、エスピリトゥ・サント街に居住する者が比較的多かった。

リマのアジア人奴隷ないし解放奴隷の出身地については、ポルトガル領インドが最も多く26人、次いで日本人5人と中国人3人であった。アジア人が奴隷とされた主要因は、王権への反逆、布教活動の妨害、債務であった。性別・年齢構成についてみれば、アジア人奴隷と解放奴隷42人のうち、男性は27人、女性は15人である。サンプル数が少ないとはいえ、30パーセントというアジア人女奴隷の比率は、同時期のリマやセビーリャの黒人奴隷の性別構成と大きく異なる。アジア人奴隷相互の再生産が期待されていなかったか、在地のインディオとの混血が想定されていたためであろう。年齢構成に関しては、年齢の判明する30人の奴隷と解放奴隷のうち、16～35歳の生産年齢帯に属する者が23人と圧倒的多数を占めた。

奴隷価格については、史料の性格上ほとんど言及がないが、1名だけ価格が推定できる事例がある。日本人皮革職により解放された24歳のアジア人女奴隷がそれで、解放金の価格から判断して、300ペソ弱であったと思われる。同時期のリマの黒人女奴隷(16～25歳)の平均価格が、473ペソであったことを考えると、アジア人女奴隷の価格は黒人女奴隷の価格より約35パーセント安価であったことになる。サンプル数があまりにも少ないが、同時期のセビーリャやカナリア諸島でも、インディオ価格は最も安価であり、アジア人奴隷の価格を代表している可能性は少なくない。アジア人を含むインディオの多くが自由人とされたこと、天然痘やペストといった疫病への抵抗力がなく、死亡率が高いと考えられたことが、アジア人奴隷の価格を押し下げた主要因であった。

こうしたアジア人奴隷と解放奴隷は、圧倒的多数が家内労働ないし家内労働兼手工業に従事しており、手工業のみに携わっていた者は、労働形態への言及のある40人のうち、わずか3人にすぎなかった。家内労働の高い比率は、同時期のリマやセビーリャでも確認することができ、一般的現象であったとみてよい。奴隷所有者の職業ないし身分——これが分かるのは、42人の奴隷のうち25人——についていえば、有力者とその妻10人、商人と船長7人、軍人と官僚5人、修道会関連2人、寡婦1人と多様であった。手工業者による所有事例が皆無であるのは、リマのアジア人奴隷の大きな特色である。有力者が社会的威信を強化するための「権威財」として、アジア人奴隷を所有する傾向が認められるとはいえ、これを固定的に考える必要はない。16世紀半ばのアジア人奴隷ディエゴ・インディアスのように、官僚、靴職、司祭、商人の間を転売される事例もあるし、有力者や官僚、商

人が奴隷を手工業者に賃貸する事例も確認されるからである。

既婚・未婚の別についていえば、アジア人奴隷と解放奴隷のうち結婚しているのは 9 名で、結婚率は 23%であった。劣悪な生活条件を反映して、既婚者 1 世帯あたりの子供数は 1.1 にすぎない一方で、サンプル数は少ないものの、同じエスニシティー間の結婚の確率は低くない。アジア人奴隷・解放奴隷の姓と名に関しては、姓名の判明している 38 名のうち、名だけの単名表記は 80%前後と圧倒的多数を占めている。奴隷は言語や宗教、エスニシティーを異にする別種の共同体に、強制的に編入された「名誉喪失者」に他ならず、姓の所有による共同体の祭祀から排除されねばならなかったからである。

アジア人奴隷と解放奴隷は、所有者の屋敷内の小屋や屋根裏部屋に居住し、質素な食事と衣服、靴を給付されて、家内労働や手工業に従事した。逃亡を試みて失敗した奴隷や反抗的な奴隷には焼印が押され、女性奴隷は所有者の側妾となり、庶子をもうけることも少なくなかった。

17 世紀のリマでは黒人とインディオ、ムラートの兄弟団は組織されていたものの、アジア人のそれは史料的に確認できない。しかし会員の相互扶助と慈善活動、霊的救済を目的にエスニシティーごとに組織された兄弟団は、マイノリティーとしてのリマのアジア人移民と奴隷に不可欠の社会的結合である。多数の貧民を含んでいたに違いない、リマのアジア人移民と奴隷が、何らの兄弟団も組織することなしに、日常生活を営めたとはおよそ考えられない。民衆教化、社会的規律化の一環として王権と教会は兄弟団の設立と拡大を推進していたし、マニラでも兄弟団が組織されていたとすれば、リマでそれが樹立されなかったと考えるべき理由はない。

主要参考文献

1. N.D.Cook, *Padrón de los indios de Lima de 1613*, Lima, 1968.
2. J.Salutan Luengo, *A History of the Manila- Acapulco Slave Trade*, Tubigon, 1996.
3. F.P.Bowser, *The African Slave Trade in Colonial Peru 1524-1650*, Stanford, 1974.
4. A.Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, London, 1993.
5. C.Bernand, *Neglos esclavos y libres en las ciudades hispanoamericanas*, Madrid, 2001.
6. I.Moreno, *La antigua hermandad de los negros de Sevilla*, Sevilla, 1997.
7. J.Gil, *Hidalgos y samurais. España y Japón en los siglos XVI y XVII*, Madrid, 1991.
8. W.D.Phillips, *Historia de la esclavitud en España*, Madrid, 1990.
9. P.Latasa Vassallo, *Administración virreinal en el Perú : Gobierno del Marques de Montesclaros*, Madrid, 1997.
10. I.Alba Rodríguez, *Vida municipal en Manila (siglos XVI- XVII)*, Córdoba, 1997.
11. 岡本良知『16 世紀日欧交通史の研究』原書房、1980 年。
12. P.パステルス『日本・スペイン交渉史』大修館書店、1994 年。
13. 岩生成一『南洋日本町の研究』岩波書店、1995 年。

- 14.0. パターソン(奥田暁子訳)『世界の奴隷制の歴史』明石書店、2001年。
15. 網野徹也「インディオ・スペイン人・『インカ』」『南北アメリカの500年』第1巻、青木書店、1992年。
16. 関 哲行「15世紀末～16世紀のスペインの都市社会と奴隷」『歴史学研究』1994年、第664号。